

第 5 章

ソ連邦崩壊後の 家庭内関係と家族像



タシケント州のシャムシオボッド・マハッラで撮影した大家族
(2006年)

ソ連邦崩壊は単に人々の経済的な状況や政治に対する考え方を変えただけでなく、個人的な関係まで変えてしまった。一見、公的な領域だけで起きているように見えるさまざまな変化は、個々の家庭までも直撃している。本来、ウズベキスタンにおいて家族の役割は非常に重要だが、近年それは急速に変化している。

I ソ連邦崩壊後のウズベキスタンにおける家族像

1 人々は何を重要だと考えているか

ウズベキスタンの多くの家庭では、家族を非常に重視し、日常生活で発生するさまざまな問題に関して家族の意見を尊重する。このことは、第1章で述べたように、ウズベキスタンの人々の生活において伝統的側面が依然として強いことを示していると言える。そもそもウズベキスタンでは、家族という言葉が両親と子供の核家族だけでなく拡大家族をも意味することが多い。家族や親戚での集まりも多く、さまざまな儀礼（冠婚葬祭）で家族

の結束力が問われる。しかも、各家族の結束力は本人たちにとって意味があるばかりではなく、周りの人たちがその家族に対してもつイメージをも決めることになる。家庭内で家族同士がどのような関係にあるのかによって、家族の各メンバーの社会的立場や他人からの尊敬度が決まるとも言える。

ソ連時代にはウズベク人の間でも個人主義的な考え方が広まったが、スラブ系の民族に比べればウズベク人の家族の結束力は強かった。独立後のウズベキスタンでは、家族の結束や一体感がシンボリックな意味をもつだけでなく、機能的な役割をも果たすようになっていく。ソ連邦崩壊に伴うさまざまな社会・経済問題は、革命以前のよ

表4 自分の生活の中で重視する社会的組織の割合

(%)

| 重要な社会的組織 | 五つ選択 | | 一つ選択 | |
|----------|------|------|------|------|
| | 2003 | 2005 | 2003 | 2005 |
| 家族 | 98.0 | 98.4 | 91.0 | 92.6 |
| 親戚 | 74.1 | 80.0 | 2.5 | 1.9 |
| 職場 | 53.0 | 59.3 | 2.0 | 1.6 |
| 出身地 | 47.1 | 41.4 | | 0.9 |
| 近隣 | 38.3 | 39.5 | | |
| 宗教 | 26.5 | 27.8 | 2.5 | 2.1 |

(出所) ウズベキスタンにおけるアジアバロメーター調査(2003年、2005年)

うな家族の結束力を復活させ、拡大家族の存在感を再び強めた。

人々の家族に対する姿勢はさまざまな世論調査でも明らかにになっている。例えば、アジアバロメーター調査^二 五年では、「自分の生活の中で重視する社会的組織は何か（複数回答、五つまで）」という質問に対し、回答者の九八％が家族を第一位に挙げた。また、「自分の生活の中でもっとも重視する社会的組織は何か（単数回答）」という質問に対しても、圧倒的多数（九二・六％）が「家族」を選んだ（表4）。

ウズベキスタンでは家族が社会生活の中心であり、精神的・経済的サポートという機能を果たしている。この調査結果は、劇的な変動の時代において、人は精神的な安心感を提供してくれる社会的集団や組織を重視する傾向があることを示している。また、もっとも重視する組織として家族に次ぐものは親戚、職場、宗教となっている。この優先傾向もまた、経済的・精神的に不安定な時代に、ウズベキスタンの人々は家族や親戚の絆を深めるとともに、宗教によりどこを求め、家族を養うことができる事に専念すること、自分の不安を解消しようとしていることを示唆している。家族がもっとも重要な単位であるのは他の社会とそれほど変わらないが、他の社会的な仕組みと比べても家族が圧倒的に重要と答える人が多いことは、ウズベキスタン社会全体が家族という単

位を中心的な仕組みと見なすことを示している。

ウズベキスタンの人々の家族に対する思いは、他の中央アジア諸国の人々と同様に非常に強いものである。家族に対する愛着の圧倒的な強さは以下のデータにも表れている。「自分の生活の中でもっとも重視する社会的組織は何か」という問いについて、中央アジア五カ国で得られた回答を見ると、家族と答えた人がいずれの国でも非常に多いが、ウズベキスタンではその割合がもっとも高い(表5)。そういう意味で、ウズベキスタンの人々にとって、家族は内容面でも優先度でも生活において重要な位置を占めているといえる。

2 親は子供たちに何を望むか

家族がいかに重視されているかは、ウズベキスタ

表5 自分の生活の中でもっとも重視する社会的組織の比較
(一つ選択) 中央アジア5カ国の例

(%)

| | 家族 | 親戚 | 職場 | 出身地 | 言語 | 近隣 | 宗教 |
|----------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| カザフスタン | 85.3 | 7.8 | 2.1 | 1.3 | 0.1 | 0.3 | 1.0 |
| キルギス | 90.4 | 4.0 | 1.3 | 1.5 | 0.3 | 1.0 | 0.9 |
| タジキスタン | 84.6 | 6.5 | 4.3 | 0.1 | | | 4.0 |
| トルクメニスタン | 55.1 | 25.9 | 1.5 | 5.8 | 3.3 | 3.3 | 1.4 |
| ウズベキスタン | 92.6 | 1.9 | 1.6 | 0.9 | 0.3 | | 2.1 |

(出所) アジアパロメーター調査(2005年)

ンの人々が自分の子供に何を望むかという質問への回答からも読みとることができる。表6にもあるように、息子に対して親が第一に望むのは「多くの人から尊敬される人」になることであり、「親より優れた職業人」、「家族を大切にする人」、「善い人になる」がこれに続く。この選択パターンは、ウズベキスタンの伝統的社会における男性の役割を反映している。一方、親が娘にもつとも強く望むのは「良い伴侶を見つけること」であり、「家族を大切にする人」がこれに続いている。すなわち、家庭を築きその面倒を見ることが、女性のもつとも重要な社会的役割だと認識されているのである。親は明らかに、自分の娘が行動的なビジネス・ウーマンよりも愛情豊かな母親になることを望んでいる。なお、そのような選択は男性によって押しつけられているというイメージがあるが、実際には必ずしもそうではない。例えば、二 五年の調査結果を見ると、自分の娘に望むこととして「良い伴侶を見つけること」を挙げた父親の割合（七八・三％）は母親の割合（七四・九％）よりわずかながら高い。女性である母親は社会の厳しさをわかっており、小さいころから娘を良い嫁になるよう育てているのかもしれない。さらに、この傾向は若い世代の女性にも共有されている。これは、結婚の変容についての後述の部分でも分析するように、ソ連時代と比べて大きな変化である。ジェンダーによる差別化は、親が子供に望む職業のデータによ

表6 自分の子供に望むこと

(%)

| | 男子に対し | | 男子に対し | | | | 女子に対し | | 女子に対し | | | |
|------------------|-------|------|-------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|
| | 男子に対し | | 母 | | 父 | | 母 | | 父 | | 母 | |
| | 2003 | 2005 | 2003 | | 2005 | | 2003 | | 2005 | | 2003 | |
| 偉大な学者 | 5.8 | 7.5 | 6.5 | 5.1 | 8.4 | 6.7 | 1.0 | 2.1 | 0.8 | 1.2 | 2.3 | 2.0 |
| 強力な政治的指導者 | 9.8 | 5.0 | 8.6 | 10.7 | 4.6 | 5.4 | 1.8 | 0.6 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | 1.0 |
| 億万長者（お金持ち） | 19.1 | 22.3 | 19.7 | 18.6 | 22.3 | 22.2 | 8.6 | 10.8 | 7.6 | 9.5 | 9.1 | 12.3 |
| 善い人になる | 33.6 | 27.1 | 30.5 | 36.3 | 27.1 | 27.2 | 32.2 | 29.0 | 16.2 | 18.6 | 32.2 | 25.9 |
| 多くの人から尊敬される人 | 39.9 | 39.6 | 39.7 | 40.0 | 34.7 | 44.4 | 17.5 | 14.9 | 9.7 | 19.1 | 14.4 | 15.3 |
| 親より優れた職業人 | 31.1 | 35.4 | 34.6 | 28.1 | 39.2 | 31.6 | 14.8 | 16.9 | 2.7 | 7.4 | 12.9 | 20.7 |
| 親と同じような職業や生活をする人 | 4.1 | 4.0 | 8.4 | 0.5 | 7.1 | 1.0 | 5.3 | 4.3 | 2.7 | 7.4 | 1.0 | 7.4 |
| 家族を大切にすること | 34.4 | 32.3 | 32.7 | 35.8 | 31.1 | 33.3 | 42.6 | 36.8 | 50.8 | 35.6 | 44.1 | 29.6 |
| 良い伴侶を見つけること | 21.8 | 17.9 | 18.4 | 24.7 | 14.9 | 20.7 | 75.9 | 76.6 | 75.7 | 76.0 | 74.9 | 78.3 |
| 愛情豊かな人 | n.a. | 8.8 | n.a. | n.a. | 10.6 | 6.9 | n.a. | 7.8 | n.a. | n.a. | 8.9 | 6.7 |

（出所）ウスベキスタンにおけるアジアバロメーター調査（2005年）

っても確認できる。例えば、親の約三分の一が息子に優れた職業人になることを望んでいるのに対し、娘に対するこの指標はかなり低い。

ウズベキスタン政府は、教育や就業などの面で、社会における女性の役割を制限していない（むしろ推進する努力をしている）にもかかわらず、多くの女性は、「男性は非常に優遇されている」（二二 三年で二八・七％、二二 五年で二五・四％）、「男性はどちらかと言えば優遇されている」（二二 三年で二七・八％、二二 五年で三一・一％）と考えている。この二つのグループの回答を合わせると、「ウズベキスタンでは男女が平等に扱われている」と考える女性（二二 三年で二二・九％、二二 五年で二六・七％）を大きく上回る。この調査結果は、性別に基づく伝統的な役割分業が社会に根づいているにもかかわらず、女性は性差別を感じており、現状を必ずしも肯定的にとらえていないことを示している。

Ⅱ 結婚のあり方と結婚観の変化

1 ウズベキスタンにおける結婚の重要性

ウズベキスタン社会で、結婚は非常に重要な意味をもっている。若者がある年齢に達すると、周囲は結婚の重要性を説きはじめる。一般的に、適齢期は女性が十七歳から二十五歳、男性も二十五歳くらいまでと考えられており、結婚に向けた準備は子供が小さなころから始まる。アジアバロメーター調査の一環としてウズベキスタンで行われた調査結果によると、大半の人が四十歳までに結婚し、未婚者はわずか六・七%である。

結婚は単なる本人同士のセレモニーではなく、多くの両親が夢みる人生の重要な節目である。ウズベキスタンでは、基本的に両親は子供に対して、早く結婚するよう圧力をかける。それにはいくつかの理由がある。まず、親たちは子供の将来に対して道徳的・社会的責任があると感じているが、結婚によってそれが軽減し、若者たちがより成熟し目的をもった生活を送るようになると確信している。若者も自分から結婚の話を出すより、親から

結婚の話を出されることを待っている場合が少なくない。それは伝統的規範の受容性を高め、家長の権威に対する若い世代の忍耐力と忠誠心を高めることになる。このような伝統的規範は、女性に対し、若いうちからより厳しく適用される。例えば一九九一年、ウズベキスタンでは十九歳以下の女性の四二・七％が結婚していたのに対し、この数値は一九九四年までに七ポイント増加し、四九・七％となった。なお農村部では一九九一―一九九四年の間に、九四％の女性が十八―二十四歳で結婚しており、この値は都市部でも八四％に達している。一方、男性の場合、同じ年齢層の既婚率は農村部で八五％、都市部では六五％であった（注³）。しかし、経済的な困難の中で生活に困り離婚する人も増えている。国の統計によれば、ウズベキスタンでは年間一七万人以上が結婚し、およそ一万五人が離婚している（注⁴）。

2 お見合い

一般に、ウズベキスタンにおける結婚のパターンは、若者同士が会って結婚するケースと、両親に紹介されて結婚するケース、つまり日本というお見合いがある。このうち、

お見合いには独自の論理がある。結婚は非常に重大な出来事なので、結婚が早いウズベキスタンでは、若者が自分で判断するよりも両親に相談したり紹介を求めたりすることが少なくない。結婚は本人たちだけでなく、一般に同居することが多い両親にもかかわってくる。そのため、結婚相手を選ぶ際、両親の意見は非常に重視される。両親も息子の相手を探す際は親戚や相手の女性の近所の人に内密に意見を求め、女性に関する情報を得る。こうして、女性と彼女の家について良い印象をもった後、初めて話し合いを始めるのである。まず、男性の両親は、ふさわしいと思われる女性の家に自分の親戚を送る。その親戚は、女性側の両親に挨拶して結婚の可能性について意見を求める。女性側が自分たちの家にあるような人が来ることを知らされていない場合も少なくない。このような訪問に適した日も決められており、水曜、木曜、金曜日が良いとされている。両家の両親がお互いに良い印象をもつたら、本人同士が話し合う場が設けられる。別の方法として、おばさんが間に

注(3) さらに詳細な分析は、Burieva M.P., *Uzbekistonda Oila Demografiyasi*, Tashkent: Universitet Nashrioti, 1997, pp.84-87 参照。

注(4) 二 一年のデータ。ウズベキスタン共和国国家統計委員会より入手。

入る場合もある。日本でいう仲人のような役割である。その人は自分の親戚や知り合いの子供のことを考え、若者の紹介話を持ち込む。そのような情報の持ち込みは男性側に対しても女性側に対しても行われる。彼女は男性側と女性側の情報を双方に提供し、お互いのことをまったく知らない家族同士を結ぶ役割を果たす。おばさんは、若者を紹介するだけでなく、若者同士が会う場にも同行し、最初の話し合いが終わるまで見守る。若者は二、三回会い、お互いのことを知ったうえで、結婚について決める。お互いを知る期間が短いことや、双方の両親からの暗黙のプレッシャーと期待を考えれば、お見合いは結婚を決める方法として最良とはいえないが、ウズベキスタンでは定着している。

若者にも「拒否権」は確保されており、実際に拒否する人も少なくない。例えば、筆者のある知り合いは二十歳になったときに結婚を決意した。友人たちは、彼はすぐに結婚するものと思っていた。ところが、彼は二十五歳になるまで二人近くの女性とお見合いし、ようやく相手を決めたのだった。また、お見合いがうまくいかなかった場合でも、なぜ相手側が自分を気に入らなかったか知るチャネルがある。それはお見合いを企画したおばさんである。相手が気に入らない場合、両家が気まずくならないようにおばさんとおして相手側にその旨を伝えるからである。ただし、逆のことが起こる場合もある。まとまら

ないかにみえた縁談が、紹介のおばさんをおして交渉した結果うまくいくことも少なくない。筆者の友人の結婚もそのような例である。彼も何人かの女性に会ったものの、結婚相手を選ばずに悩んでいた。しかし、彼が六カ月前に一度会って話した女性が彼のことを気に入る、紹介のおばさんをおして自分のどこがいけなかったのか問い合わせたところ、彼と再度会うことになり、結婚に至ったというわけである。

3 婚約

ひとたび結婚が決まると双方の家族が準備にかかるが、両家にはそれぞれ役割がある。婚約（フォティハ）は次のように行われる。まず、男性の家族が女性の家を訪ね、両家が結婚に合意したことを示し、それを祝ってパンを割る儀式（ノン・シンディリシ）を行う。この儀式のやり方は地域によって異なるが、一般には、まず地区の長老が若者の幸せを願ってお祈りする。その後、丸い形のナン（オビ・ノン）を二つに割り、その片方を女性側に、もう片方を男性側に配る。これは、本人たちがこれからの人生で幸も不幸も分かち合っていくことを意味する。この儀式が終わると結婚の日取りが決められ、結婚式へのカウント

ダウンが始まる。

イスラーム教の場合、結婚する際はイマームのところへ行き、彼から人生や結婚についてさまざまな話をしてもらう。儀礼の一環として、イマームは本人たちにイスラームの知識について聞く。次に、イマームは男性と女性を廊下でつながった二つの部屋に入れ、男性に「別の部屋にいる女性を妻に迎えるか」と確認する。そして、女性にも同じことを確認する。女性に意思を確認することは重要であり、もし女性が無理やりに結婚させられるならば、本当の意志を伝えるチャンスである。イマームが別の部屋から女性に「この男性と結婚する意志があるか」と聞くが、このとき、たとえその意思があつても、すぐに「はい」と答えることははしらないと考えられている。女性がすぐに答えると、彼女が結婚することに必死であることを意味するからである。そのため、女性は三回目に聞かれて初めて、控えめに「はい」と答える。以上がイマームの前での婚約である。これは結婚に関してもっとも重要な手続きの一つである。法的にはそれほど強い意味をもたないが、多くの人は結婚における宗教的側面を非常に重視している。

4 結婚式

結婚式は若者だけでなく両親にとってもきわめて重要である。両親はこの儀式を子供が生まれたときからずっと待ち焦がれている。彼らにとって、子供の結婚式は儀礼以上の意味をもっている。つまり、社会的なステータスを維持し、親戚の前で自分の家族が安定した生活、不仲の人たちにはうらやましがられるような生活を送っていることなどを示す機会なのである。だからこそ、人々は可能な限り派手な結婚式を行おうとする。子供が生まれると早くも結婚式のための費用を準備しはじめる両親も少なくない。いわば、子供の結婚式は長い子育てのゴールであり、子供が自立する過程で両親がしてやれる最大で最後のことである。そのため両親が結婚式にかかる金額は非常に高く、多くの場合、年収の何倍にもなる。このような結婚式の出費の多さから、結婚式が終わってしばらくの間は生活が成り立たなくなる人もいる。そのため、結婚式の計画を立て、その資金を集める際には、核家族だけでなく拡大家族や近隣住民、友人の役割が重要である。

ウズベキスタンは多民族社会であり、民族によって結婚式の内容もさまざまである（ま

た、地域間の相違もある。その中でも、ウズベク人の結婚式は特に費用がかかる。結婚式にはいくつもの段階があり、各段階で行わなければならないことがたくさんあるからだ。例えば、花嫁の家族は花婿にさまざまな贈り物をする。花婿の両親は花嫁と花婿に住まいを提供する。花婿の両親が同居する場合は、花婿の家が一部屋か二部屋を提供する。あるいは、小さな家が新たに建てられることもある。一方、花婿の両親が結婚するカップルのために別のアパートを用意するような場合は、事前に花嫁の家族に伝える。花嫁の家族は、その家に家具や衣料品を運び、そこで生活ができるようにしておく。どのような道具を入れるかもシンボリックな意味をもっており、良い物を入れるほど、花嫁の家族に対する尊敬度は上がるし、花婿の家族も花嫁の家族から大事にされているという実感をもつ。花嫁側は、花婿の両親や親戚にさまざまな贈り物も用意する。これも家具などを贈る儀式と同等の重要性をもつ。

その後、結婚披露宴の準備が始まる。それにかかる費用は花婿の家族が負担し、花嫁の親戚や花婿の親戚・近隣住民を招待する。結婚式の朝はまず、花婿の家族がピラフを振る舞うことから始まる。当日の早朝（五時か六時ごろ）から近隣住民と花嫁の親戚が花婿を訪ね、全員でピラフを食べ、最後に新郎新婦の幸せを祈って帰る。集まる場所は、花婿の家

(庭がある場合)、地区(マハツラ)の大通りもしくはチヨイホナ(茶店)である。花嫁の家でピラフをこちそうする儀式を行う人も少なくないが、その場合は、花婿の家のピラフの一部を花嫁の家に送り、花嫁の親戚にこちそうすることが多い。

披露宴そのものは夕方七時ごろから始まり、夜の十―十一時まで続く。披露宴会場の中心には新郎新婦、彼らの友人が座るテーブルがある。花嫁は伝統的な民族衣装よりも欧米風の白いドレスを着る傾向にある。花婿も黒いスーツとネクタイ姿である。披露宴における参加者の役割分担も興味深い。例えば、花婿の両親は座っているのではなく、客の間を回って挨拶を行い、披露宴に来てくれたことを感謝する。花婿の親戚の中でも年配者は客を迎え席に案内する。この役割は非常に重要であり、彼らがそのような役割を果たせない、参加者が多いウズベキスタンの結婚式は混乱に陥る。一方、花嫁の両親は客として参加する。披露宴の途中から花婿の親とともに挨拶して回ったり、最後にお礼の挨拶をしたりするが、披露宴でもっとも目立つ立場にあるのは花婿の両親である。客人にもある程度の役割が与えられる。花婿の友人たちは、客人として参加しながらも、料理を運ぶなどして披露宴の進行を手伝う。彼らは披露宴を盛り上げる役割も期待されており、踊りなどにも積極的に参加する。新郎新婦が客人に祝福されながら去ると、披露宴はようやく終了

する。

披露宴が終わっても結婚関連の儀式はまだ終わらない。翌日の朝から「花嫁の挨拶」(ケリン・サロム)が始まる。花嫁はまず花婿の両親に挨拶したあと、訪ねてきた親戚や近所の人にも挨拶する。挨拶するときには、花嫁は頭を三回下げ、それに対し、挨拶された人はお祝いや歓迎の言葉を送る。この儀式は、花嫁が花婿の家族やマハツラの新しいメンバーとして認められたことを意味する。

結婚式があまりに派手なので、カリモフ大統領は国民に対して、結婚式の費用を削減し、そのお金を自分たちの生活に回すよう呼びかけた。その影響で、結婚式関連の行事は少なくなつたものの、ウズベキスタン人にとって結婚式の重要性和費用は依然として高い。

Ⅲ 結婚観の変化

1 離婚率の増加

近年、若い世代では離婚率が増加している。それにはいくつかの理由がある。まず、経済状況の悪化に伴い、多くの若者が就職先を見つけるのに苦労している。結婚年齢が低いウズベキスタンにおいて、これは非常に深刻な問題である。二十代前半で結婚し、親と同居し、親の世話になるのは一般的である。親は子供を早く結婚させて孫の顔を見たいと考えており、若者もそのような親の意向を尊重して結婚を早める。しかも、お見合いの場合は知り合ってから結婚までの期間が短く、お互いの意志確認が十分なされていないことも少なくない。このような傾向は独立前にもあったが、独立後特に強まっている。

ソ連時代、女性はさまざまな分野に進出し、高校を卒業した女性はまず大学に入学してから就職や結婚のことを考えた。しかし、独立後は教育が有料化し、就職しても大した収入が得られないことから、女性は家で子供の面倒をみるのがもっとも効率がよく、女性に

とても無理のない選択なのだと考えられるようになった。そのため、高卒女子の多くは卒業後すぐに結婚する。女性が高等教育を受けると生活水準や夫への要求も高まるという考え方から、親も高等教育を重視しなくなった。高等教育を受けていない人は半人前と見なされたソ連時代とは大きな違いである。

このような女性の立場に対する考え方の変化とソ連邦崩壊に伴う経済状況の悪化により、家庭内でさまざまな問題が生じている。ソ連時代は就職口と収入が国によって保障されていたため、若いうちに結婚しても、経済的な問題が家庭内の関係に影響する心配はあまりなかった。これに対しソ連邦崩壊後は、親の支援なしに安定した生活を送ることは難しく、またそのような支援が長続きするとは限らない。結局、経済問題と結婚への精神的な準備不足がいまって離婚する人も少なくない。

筆者の友人は二十六歳のときに十八歳の女性と結婚し、自分の親の家の離れで生活しはじめた。彼は政府機関に勤めていたが、月収は日本円にすると一万円から二万円程度で、当時のウズベキスタンにしては決して低くはないがぜいたくできる額でもなかった。彼の両親も働いていたので、食料品などにはまったく不自由なく生活していた。しかし、彼も妻も若く、流行していた携帯電話や車にお金をかける傾向にあった。ある日、妻が携帯が

ほしいと言つて家に持ち帰つてきた。その値段は彼の月収の半分程度だったため、彼は携帯を返品してくるように言つた。彼から見れば、妻は自分の限られた収入の有効な使い方を考えない大人げない言動をとつたように思え、怒つたのである。他方、妻は「いつまでも我慢しなければならぬ生活」に不満をもつていた。このような小さなことから二人の間に溝ができ、それが次第に両家の対立にまで発展した。最終的に彼らは離婚したが、これは決して例外ではない。結婚年齢の若年化、精神的な準備不足、さらにさまざまな経済的困難が離婚の増加につながり、社会問題になっている。

2 夫婦関係の変容

ウズベキスタンにおける家庭内関係の変化は、夫婦関係の変容にも見てとることができる。ウズベキスタンの多くの家庭は保守的である。男性が家族を養い、女性は仕事をもつつつも、家庭を支える。ソ連時代、男性は家の責任者として、外で積極的に動き回るという役割を担っていた。しかし、ソ連邦崩壊後の変化はそのような構図にも影響を及ぼした。夫が安定した仕事に就いている家庭では伝統的な男女間の役割分業が今でも存在するが、

収入が不安定な家庭では、女性と男性の役割が逆転することも珍しくない。

例えば筆者の友人の家族はその一例である。彼の母親は優秀なエコノミストで、ソ連時代は国家計画委員会（ Gosplan ）の上席専門員だった。彼の父親も経済学の学位をもっており、国有の大きなレストランで支配人として働いていた。父親の収入が非常に高かったため、経済的にも豊かな生活を送ることができ、母親は重要なポストに就きながらも家庭を最優先していた。ところが、一九九一年のソ連邦崩壊以降、生活が一転した。まず、父親のレストランが民営化され、彼は職を失った。計画経済の象徴だった母親の仕事場は改革を余儀なくさ



タシケント州のシャムシオボッド・マハッラ・長老の家族の朝食
（2005年撮影）

れ、彼女の社会的立場も収入も一気に低下した。そこで、母親は政府の仕事を辞め、キルギスや中国に行って仕入れてきた商品を市場で売りはじめた。しかし父親は、そのような担ぎ屋ビジネスは自分たちの教育レベルやキャリアに見合っておらず、みつともないことをしていると思っていた。

その後、母親の仕事は繁盛し、そのおかげで息子と娘の結婚式の費用などを賄うことができた。また、友人は結婚した後、国立病院の医者になったものの給料が低く、母親は息子の家族の生活費まで負担していた。一方、父親はどんどん内向きになり、家にひきこもるようになってしまった。一日中寝ているかテレビを見ているような状態が続くと、父親に対する子供たちの態度も変わりはじめた。彼らから見ると、母親は一生懸命働いて家族を助けようとしているのに、父親はすべてをあきらめてしまい、楽で無責任な生活を送っていた。子供たちは次第に父親を無視するようになり、家族内で重要な決断が必要になると、父親ではなく母親に相談した。実際、最終的な判断をするのは母親の方で、父親は事実上、家族のお荷物になってしまっていた。それに気づいた父親は母親の仕事を少し手伝いはじめたものの、かつては経営者だった自分が市場でものを売るといふことに対して精神的な壁を破ることはできなかった。夫婦は離婚こそしなかったものの、事実上の家庭内別居が

続いている。離婚しない唯一の理由は、結婚した息子や娘が彼らの家族や親戚から白い目で見られるからである。

ここで挙げたケースはほんの一例であり、独立後のウズベキスタンでは多くの家庭が大なり小なりさまざまな変化を経験しているはずである。男性よりも女性の方がさまざまな変化にうまく適応すると言われるが、市場経済化に伴って「男性のする仕事」が減り、「男性にふさわしい給料の仕事」も見つけにくくなったことが少なからず影響していると思われる。



1960年代のタシケント (G. Sekimori 撮影)。